

氏名	山内政樹
学位の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	甲文第106号(文部科学省への報告番号甲第366号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2011年3月3日
学位論文題目	Life as Journey: A Study of Walking in the Works of Thomas Hardy
論文審査委員	(主査) 教授 福岡忠雄 (副査) 教授 花岡秀 教授 東浦弘樹

論文内容の要旨

本論文は、作家トマス・ハーディの小説における「歩く」という行為が作中でどのように表象されているのか、またどのような機能を果たしているのかを研究したものである。

「歩く」という行為は人間の常識的な行動様式としてあまりにも自明視されてきたので、その歴史的意味合いについてあまり考えられてこなかった。ここで言う歴史的意味合いと言うのは、例えば性をめぐる単なる肉体的行為が歴史上のあらゆる形で表象され、歴史的、文化的意味を賦課されてきたのと同様に、「歩く」という行為もまたそのような表象の歴史の中に位置づけられたと見ることも可能ではないかということである。ハーディの小説には、十九世紀のほかの作家の小説冒頭部とは異なり、ある登場人物の歩く描写から始まり、主人公が歩いて行き着いた先に死が待ち構えているという小説がいくつかある。小説冒頭部という重要な場面で歩行の描写を頻出させることには何かしらの意味が込められていると考えられる。そこで、本論文ではハーディ小説の中でも、特に「歩く」行為に重要な意味合いが賦課されていると考えられる小説を中心に、「歩行」がどのような意味を持っているのか、また物語の展開においてどのような機能を果たしているのか、そして登場人物が歩く道や空間にはどのような役割が与えられているのか、その歴史的、文化的意味合いについての論証が試みられている。

本論文の第一部では、*The Return of the Native* において、ヒロインのユースティシアと小説の舞台であるエグドン・ヒースの関係を中心にユースティシアの「歩く」行為が考察されている。限られた空間の中を歩き回るユースティシアは女性であるが故に、道を歩く際にさまざまな障害を受ける。それにもかかわらず彼女が歩き続ける理由は何かについて考察し、さらに女性の歩く行為がいかに困難であるかを男性の登場人物との比較によって明らかにされている。その上で、男女間での「歩く」ことの意味や表象のされ方に大きな違いが生じることが論じられている。

第二部においては、*Jude the Obscure* を、主人公ジュードが学問・宗教と結婚の二つの道を選択する小説として読み直す試みが行われている。ジュードが歩む道は本来学問の都であるクライストミンスターに通じているはずであったが、それをアラベラの策略により、結婚へと導かれる。ジュードは歩きながら本を読む習慣を身につける。彼にとって「歩くこと=考え、学ぶこと」であったが、アラベラの登場によって求愛のポーズである散歩へとすりかえられることになる。ふたたび学問・宗教の道へジュードは進もうとするが、第二の女性スーの登場によって結婚へとそれていく。ただし、スーとの結婚は完遂せずに彼は根無し草の状態でさ迷い歩き、死を迎える。男性の学問が女性によって妨げられる姿がジュードの道の選

択によって描かれていることを検証する。

第三部の *Two on a Tower* では、階級問題を中心に、身分ある女性が身分なき男性と並んで歩くことへの苦悩や葛藤が、歩く姿や道の選択を通して描かれていることが検証されている。また、アラベラやスーとは異なり、ヒロインのヴィヴィエットは男性の学問を妨げる障害とはならず、自らの身を犠牲にして男性の目標を達成させる。男性の障害にはならないというヴィヴィエットの選択が、彼女の歩むべき道の描写に反映されていることが検証されている。

第四部の *Tess of the d'Urbervilles* では、テスの移動によって物語が展開していくことから明らかなように、歩行が重要な役割を果たしている。彼女が歩く先々で、不吉な前兆—男性の眼差し、車輪の回転、スピード—が彼女について回り彼女を苦しめていく。これらの不吉な前兆に苦しめられながらもテスは歩き続け、最後にストーンヘンジにたどり着く。彼女の人生はまさに“life-as-journey”を体現するものであり、ハーディの描く「歩く」の意味を身をもって表した人生であることが考察されている。

論文審査結果の要旨

本論文は、イギリスのヴィクトリア朝期の文豪トマス・ハーディの小説を論じたものである。山内氏の方法は極めて明快で、ハーディの多様な作品を「歩行の表象」という一点に絞って考察しようというものである。歩行そのものは日常の極めて基本的な身体運動であり、どの小説でも必ず出てくるものである。問題は、この基本的な身体運動がどう「表象」されているかということである。

山内氏も指摘しているようにハーディの小説の少なからぬものが「道行く人」の描写で始まっている。*The Return of the Native*、*Tess of the d'Urbervilles*、*The Mayor of Casterbridge*、*The Woodlanders* など、すべてそうである。しかも、これらすべてが作品の冒頭部分である。ということは、ハーディの作品での「歩行」はなにか特別な意味を負わされているのではないか、ある人物の歩行の描写を通じて、物語全体にかかわる暗示的効果が意図されているのではないかなどが考えられてくる。その意味で歩行の意味は、その時代の文化的・歴史的価値体系と結びついていて、逆に言えば、歩行の表象を読み解くことで、この時代の文化的・歴史的な配置構図が見えてくる。山内氏の研究もそれを明らかにすることを目指すものといえる。

例えば、*The Return of the Native* の中でヒロイン、ユーステイシアは絶えずエグドン・ヒースを歩き回る。激しい情熱の持ち主である彼女にとって、エグドンはその情熱のはけ口をすべて封印するがゆえに「牢獄」でしかない。彼女の彷徨はそのフラストレーションの現れである。しかも、彼女が歩くのは夜である。当時女性が夜一人で歩くことは犯罪に巻き込まれる危険性とは別に、道徳的に「ふしだらな」行為とみなされていた。当時の文化的価値が押し付けてくるタブーを侵した彼女は当然村人に白眼視され、挙句「魔女」の疑いをかけられる。もともと、階級的に孤立していた彼女はこれによってますます孤立感を深め、追い詰められる。残された手段は、歩いてこの地を脱出するしかない。だが、彼女の越境は許されず、濁流に吞まれて溺死する。この要約だけでも、この小説がユーステイシアの歩行に込めた重層の意味がわかるはずである。

本論第三部で氏は *Two on a Tower* を取り上げ、ヒロインが「歩行」と対比的な「馬車」で登場することに着目する。つまり、貴族階級の象徴的移動手段としての馬車は、この小説がこのあと「歩行」に頼る平民階級の青年と馬車の中のレディ・コンスタントインとの階級をはさんだ複雑な恋愛を軸に展開することを予兆すると氏は指摘。また、「歩行」は当然の延長として直接的にも比喩的な意味でも「路」(path)に結びつく。ふたりの歩む「路」が、レディ・コンスタントインの場合たびたび winding と描写されるのに対し、スイジンの場合 forking であることが多い。この作品はハーディの他の作品に比べて心理小説

の色合いが濃い、ハーディはここでも登場人物の心理の内側に入り込むのではなく、あくまで外面的描写を堅持しながら、二人の心の動きを描出しようとしている。つまり、winding path は、彼女がこの年下の青年を愛してしまった煩悶、躊躇を暗示し、forking は青年の未来への逡巡、選択を暗示する。それにとどまらず、自分のために青年がその将来を台無しにするのではないかとの彼女の懊悩が、随所で、彼女の歩行の描写中に組み込まれているという。

以上は氏の論文のほんの一部を紹介したもので、不当に簡略化したという懸念もあるが、本筋では氏の立論の中核に当たるところだと思う。

本論の最大の美点は、豊穡なハーディ小説の世界を「歩行の表象」の観点にひたすら絞り込んで論じていることで、これによって議論が拡散的に墮すことを免れている。しかし、その代価として、「歩行」にこだわる余り、ハーディ文学の複雑な諸要素がすべて「歩行」に収斂させられてしまっているとの印象も否めない。また、氏は「斬新な切り口」を求めることに熱心な余り、時に説得力に欠ける「説」を持ち出すきらいがある。

それらの点は今後の研鑽に待つとして、本論文が博士論文としての要件を十分に備えていることは間違いなく、本論文審査委員三名は、論文の審査並びに2011年2月17日に実施した口頭試問の結果から、山内政樹氏が本論文によって博士（文学）の学位を受けるに値すると判断し、ここにご報告申し上げます。